

第 1 回「政府衛星データのオープン&フリー化及びデータ利用環境整備事」に関するアドバイザリー委員会 (議事概要)

日時：平成 30 年 9 月 19 日（水曜日）10:00-12:00

場所：経済産業省別館 8 階 850 各省庁共用会議室

出席者：

(委員) 夏野座長、石田委員、松浦委員、柳原委員、藤原委員

(オブザーバー) 内閣府、文部科学省、総務省

議事：「政府衛星データのオープン&フリー化及びデータ利用環境整備事業」の実施計画について 等

9 月 19 日、第 1 回「政府衛星データのオープン&フリー化及びデータ利用環境整備事業」に関するアドバイザリー委員会（座長：夏野 剛 慶応大学大学院政策・メディア研究科 特別招聘教授）が開催された。各委員からの主な意見は以下のとおり。

<データ整備の考えについて>

- 衛星データは扱ったことがない人にとってはとっつきにくい。できれば地理上の位置情報と、当該情報を時間軸で追いかけられるようなデータセットがあると扱いやすくなる。ユーザを増やす観点から、データ収集後ユーザが利用しやすい形で整備することが重要。
- ユーザからは利用したいデータがどの衛星のどのセンサで取得できるのかがわかりにくく、プラットフォームでこのような状況を打破すべき。欲しいデータがどの衛星から取れるのか、ワンストップで答えられるファンクション作りが理想。

<サポートについて>

- トレーニングセッションのような場に出た内容を Q&A として公開するだけで、ある程度想定される質問には対応できるのではないか。
- 1 つ 1 つテキストで検索できるようにしておくことが重要で、Q&A として溜まっていく仕組みを作る必要がある。
- ウィキペディアのような形で、皆が書き込んでアップデートされていき、正しい情報が自動生成されていく仕組みを作るのはどうか。

<展開する情報について>

- 全ての情報をオープンにすることによって、テナント側の商売となる情報までユーザに提供することになってしまう恐れがあり、本当にオープンにしている情報なのかという議論が発生してしまうのではないか。結果、オープンにできる情報は、結局データの見方や使い方というものになってしまうのではないか。どこまでオープンにするのか調整が必要である。
- ビジネスに関わる情報か否かは線引きの問題。クローズドな領域（実際に現場での計

測をしたり、独自のデータとかけ合わせたり) も含めることでビジネスとして成り立つのであって、オープンソースの掛け合わせだけでは必ずしもビジネスを阻害する要因にはならないのではないか。衛星データ利用の促進をするのであれば、不要に妨げるべきではない。

<テナント集めについて>

- Tellus を認知させ利用させるための、最初のテナントをどう作るかが課題。
- マーケティングの観点で、興味を持ってもらえそうな 5~10 ほどのテナントに対し声をかけるとよい。
- マーケットデータは、金融のリサーチャーや企業のマーケット担当が目につきやすいものであるので、有効ではないか。
- また、コンテストで扱ったものがゆくゆく自治体を買ってもらえるようなシナリオができていると、商業利用の人もコンテストに参加しやすく、モチベーションになる。せっかくであればコンテストを次につなげる仕組みにしたらどうか。

<テナントの定義について>

- データアルゴリズム、アプリケーションなどを提供する側を“テナント”と定義。一部事業者側も含まれる。

<過去のデータ（アーカイブデータ）の扱いについて>

- データのリアルタイム性が注目されているが、プラットフォームビジネスをやるには、アーカイブデータを使うアプリケーションがどれだけあるかが重要になってくるのではないか。そうでなければ、データは溜まるが活用されない、リアルタイム性が求められるのに衛星が追いつかないなどの課題を抱えてしまう。

<エンジニアにとっての使いやすさについて>

- オウンドメディアのほか GitHub などにコードが上がっていると良い。
- コンテスト内でチャットをやりながら、Git やブログにあげたりできるのであれば、フォーラムを開けることは可能。

○お問合せ先

製造産業局宇宙産業室
電話：03-3501-0973
FAX：03-3501-7062